常識にとらわれない探求心を支え、未来を拓く次世代の知を育む

北川進 理事・副学長、高等研究院特別教授が2025年ノーベル化学賞を受賞

多孔性金属錯体(MOF)の開拓と環境・エネルギー問題への貢献

本学の北川進 理事・副学長、高等研究院特別教授が2025年ノーベル化学賞を受賞しました。授賞理由は「多孔性金属錯体(MOF)の開発」で、Richard Robson(リチャード・ロブソン)教授、Omar M. Yaghi(オマー・ヤギー)教授との共同受賞となります。

北川特別教授は、金属イオンと有機配位子が規則的に結合したナノサイズの多孔性材料「MOF」を開発。その細孔に気体を大量に取り込めることを1997年に世界で初めて立証し、これをきっかけに、MOFによる水素や天然ガスの大量吸蔵をめざす研究が世界中で盛んに行われるようになりました。気体の貯蔵や分離、さらには違う性質を持った気体へ変換する触媒としての利用が期待されており、エネルギー・環境・生命といった今日の課題に化学がどう応えるか、その新しい領域を切り拓いた仕事として、国際的に高く評価されています。

受賞決定翌日の会見では、研究者を目指す若い世代に向けて、京都大学の伝統である知的好奇心を大切にし、「無用之用」の精神で面白いことに挑んでほしいと語りました。いま役に立たないと思われていることも、違う視点で見れば大きな意味を持ちうる。「もうすでに先人たちが多くの研究をしてきたから、『やることがない』と、あきらめず、チャレンジ精神を持って挑戦していただきたい」。環境、エネルギー、生命、医療と課題は山積しているとして、「若い方々には、ますます研究にのめりこんで欲しいと思います」と結びました。




© Nobel Prize Outreach. Photo: Nanaka Adachi

日豪印(AIJ) Week FY2025:
三か国の連携で拓く若手研究者の国際共同研究と次世代ネットワーク

総合研究推進本部は、これまで培ってきた若手支援の知見やネットワークを活かし、日豪印の複数研究機関と連携して、若手研究者が国際的な視野を広げ、グローバルな研究ネットワークを構築するための支援を行っています。2025年には2回にわたり「日豪印Week」を実施し、11月27日にはその集大成となる「日豪印・京都ラウンドテーブルFY2025」を開催しました。公募で選ばれた9課題に取り組む3カ国の研究チームが参加し「AIJ (Australia, India and Japan) の研究協力におけるコモナリティと独創性」をテーマに議論を深めました。今回、インドおよび豪州の大学からも共同資金(マッチングファンド)が拠出され、持続的な3カ国連携に向けた大きな一歩となりました。今後は9グループの研究活動を本格化させるとともに、外部資金の獲得やパートナー校との資金継続協議を通じて、持続可能な国際共同研究ネットワークの確立を目指します。







京都大学レクチャーシップアワードを創設

2025年度は医学・生命科学分野の受賞者を決定

2025年度、京都大学レクチャーシップアワードを創設しました。アジア最多のノーベル賞受賞者を輩出してきた本学が、その伝統を背景に、次代の科学技術を切り拓く新進気鋭の卓越した研究者を、国内外を問わず顕彰する国際学術賞です。特色は、受賞者を京都に招へいし、特別レクチャーと交流を通じて、次世代の研究者に触発の機会を届ける点にあります。

第1回となる医学・生命科学分野の受賞者は、プリンストン大学のクリフォード ブラングウィン博士。受賞理由は「『液-液相分離(LLPS)』が細胞内の空間的組織化の基本原理となることを発見」。細胞のなかで物理現象が働き、膜を持たない構造体をつくり出していることを示した業績で、「細胞は膜で仕切られる」という従来の常識を塗り替えるものです。

百周年時計台記念館で開催した授賞式・記念講演会には、多くの研究者や学生が集まり、活発な議論が繰り広げられました。あわせて開催された若手研究者との交流ワークショップでは、研究への熱意や考え方、キャリア形成について熱い議論が交わされ、次世代の知を刺激する貴重な機会となりました。





京都大学発の雑誌『京大マガジン』を創刊

出版を通じた研究者交流の基盤形成・研究推進事業

京都大学総合研究推進本部では、株式会社ミシマ社との共同企画として『京大マガジン』を創刊し、2026年3月19日に0号「失敗」を刊行しました。『京大マガジン』は京大の基本理念にある「研究の自由と自主」の思想を体現することを目指して制作する、新しい雑誌です。ミシマ社との共同により大学の内と外をつなぎ、社会への回路を開くことで、研究の多様性や潜在的可能性を可視化し、内外での対話をベースに研究を推進してまいります。刊行後は関連イベントも含め学内外で大きな反響を呼び、0号も即完売となるとともに、10代～80代のじつに多様な読者からハガキが届き、「大学で勉強することが楽しみになる」「『学際』ではなく、研究者がまったく異質の領域から刺激を受けて新たなるものを創り出すのが愉快」「とにかく自由で、無意味で無駄なことが許容される（むしろ奨励される）学風がにじみ出ている」など、多くの熱のこもった感想や応援メッセージが寄せられました。











異分野融合を促す学内ファンド「むすびめ」を創設

自由度の高い研究資金と他分野との交流を育む研究会で研究を深化

京都大学は2025年度、人文社会科学から自然科学まで全分野を対象に、異分野交流を通じて研究の深化を目指す学内ファンド※「むすびめ」を創設しました。採択者には自由度の高い研究資金と、他分野の研究者と相互研鑽を重ねる研究会への参加機会を提供しています。初年度は56名の応募から48名を採択し、2026年度末まで2ヶ月に1回のペースで研究会を開催。日常では接しない研究者同士の交流により、新たな視点の獲得やネットワーク構築、他分野への理解醸成につながると好評を得ています。

※学内ファンド:本学の目標に向け、学内資金を教職員等に提供する制度。